

「自己評価」による授業改善

—小学校理科におけるOPPAを活用した事例を中心として—

中 島 雅 子 埼玉大学教育学部自然科学講座

キーワード：自己評価、OPPA、授業改善、教育評価

1. はじめに

本稿の目的は、小学校理科における「一枚ポートフォリオ評価法（OPPA：One Page Portfolio Assessment、以下OPPAと記す）を活用した事例を中心に、授業改善における「自己評価」の効果を明らかにすることである。その理由は次の通りである。

近年パフォーマンス評価やポートフォリオ評価が注目され、実践も数多く行われるようになってきた。しかし、学校現場での大きな広がりは見られない。その理由の1つとして、これまでは、評価と授業改善をどう結びつけるのかに関する視点が不明確であったことがあげられる。つまり、評価を具体的にどう授業に生かすのかが明確ではなかったと考える。

上記を鑑み、これまで「自己評価」による授業改善の研究に取り組んできた。ここでいう「自己評価」とは、概念の形成過程の自覚化を指す。つまり、自分がどのように概念や考え方を形成していくのかを自覚することである。「自己評価」に注目したのは、次の2点にある。まず、学習者も教師も、自己の問題点を自覚しなければ、真の意味での改善は難しいと考えられるからである。次に、これまでも言われているように、学習者の「素朴概念」は強固であるからである。これを変容させるためには、どのような授業方法を講じるにしても、最終的には、学習者が自身の概念の形成過程を把握し、その改善の必然性を自覚することが重要と考える。つまり、これが学習者による「自己評価」である。これは、教師自身も必要であろう。なぜならば、教師自身も自らの授業を問い直すことが授業改善には必須であると考えられるからである。さらに、これまで、学習者の「自己評価」と教師の「自己評価」を結びつけてこなかったことが、指導と評価の一体化がなされにくい原因の1つと考える。

OPPAに注目したのは、次による。OPPAは、堀 哲夫の「一枚ポートフォリオ評価（OPPA）」論に基づき、概念や考え方の形成過程の自覚化に注目して開発された「自己評価」法である¹⁾。したがって、OPPAの効果を検証することで、学習や授業改善における「自己評価」の役割が明らかになると考える。

2. 研究の経過

これまで研究を進める中で、いくつか課題が明らかになった²⁾。主に次の3点である。

第一に、授業改善における教師の教育観の問題である。教育観とは、「教育とは何か」に関する考え方を指す。この中で次の2点が明らかになった。一つ目は、授業改善においては「授業方法の工夫」や「教材開発」に教師の関心が集中していること、そこでは評価を活用する必然性は持

ちにくいといった教師の評価観の実態である。このような評価観に基づき、教師は評価を行っているならば、改善に有効な形成的評価が行われているとは考えにくい。したがって、評価と指導を接続する視点が不明確となり、たとえ、優れた教材研究など授業方法の工夫が行われたとしても、真の学習・授業改善に結びつかない可能性があることがわかった。これは、そこで重視すべき学力観（育成すべき学力とは何か）や授業観（授業はどうあるべきか）とも大きく関係する（図1）。二つ目は、教師の教育観について、可視化された児童の学習状況を授業の直後に認識することで、教師は、その変容が迫られることである。これは、OPPシート（OPPAで活用するシート、図2参照）により概念や考え方の形成過程を可視化することで可能になると考えられる。こうした児童の思考が外化されたことに基づき、教師が自分自身の教育活動について内化し内省する必然性が生じたことで、教師は、教育観の変容が迫られると考える。この内省の必然性により、OPPシートは学習者の記述であるが、それを通した教師自身の振り返りが可能になる。その繰り返しにより、教師自身の教育観が変容していったと考えられる³⁾。

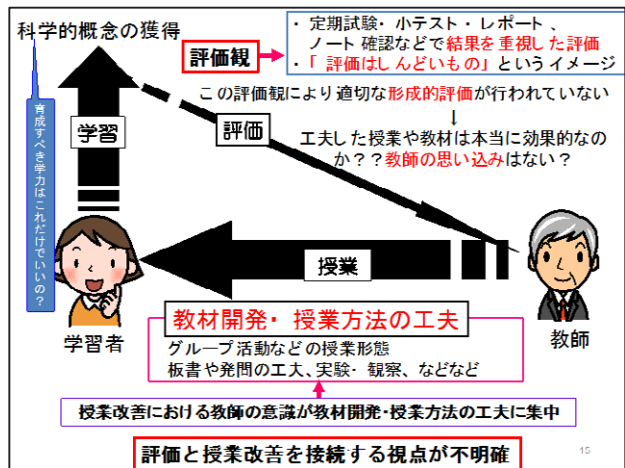


図1 これまでの授業改善に関する教師の教育観

第二に、これまでの自己評価は自分の学びにA, B, Cをつけることや、「よかった」、「おもしろかった」といったような情意面が中心で、認知面の視点が見られなかったことである。これら第一と第二により、学習・授業改善に自己評価が活用されることは殆どなかった。

第三に、「自己評価」能力育成の問題である。田中耕治は「自己評価能力は、メタ認知とかモニタリングとも言われる」と述べる⁴⁾。すなわち、「メタ認知」の育成が「自己評価」の鍵となる。

以上、3つの課題の克服についてOPPAの効果を検討した結果、OPPシートに設定される3つの「問い」（図2の①～③）が、学習者のみならず教師の自己評価を促すことが明らかになった⁵⁾。

図2 OPPシート(OPPAで用いるシート)の一例と骨子の概要

3. OPPシートに設定される3つの「問い」

ここでは、この3つの「問い」について説明する。OPPシートは、使用する教師の裁量で工夫することができるが、いくつかの必須事項がある。それが、①から③の3つの「問い」を設定することである（図2参照）。

- ① 単元の学習前・後で記入する「本質的な問い」
- ② 「学習履歴欄」における「この授業で一番重要だと思ったことは何ですか？」
- ③ 「最下段の欄」に記述するこの「単元全体を通しての自己の変容を自覚させる質問」

①は、その単元において最も重要だと思われる本質的な概念や考え方を問うものである。単元の学習前・後で同じ「問い」を設定することで、学習による変容を意識させ、「学ぶ意味」や「学ぶ必然性」を獲得させる機能を持つ。したがって、知識レベルではなくその単元の本質を自覚させるような「問い」をたてる必要がある。そこでは、教師の力量が問われることになる。②と③は、学習者に自分の学びのふり返りを促す意図がある。

これらは、すべて、学習者自身が自分の概念や考え方の形成・変容過程を自覚するためのOPPシートのしかけである。先ほども述べたように、この3つの問いが、学習者と教師の「自己評価」を促す効果があることがわかっているが、その効果における要素と構造といった仕組みについては解明されていない。

4. 目的

以上より、本稿では、授業改善における「自己評価」の効果について、授業改善におけるOPPシートの「問い」のもつ機能を、今回は、学びのふり返りを促す意図を持って設定された②「この授業で一番重要だと思ったことは何ですか」と③「単元全体を通して自己の変容を自覚させる質問」を中心に検討を行う。具体的には、小学校6年生理科「ものの燃え方」と「てこの働き」単元におけるOPPAを活用した事例を中心に行う。

5. 授業の概要と研究方法

5-1 授業の概要

小学校6年生「ものの燃え方」および「てこのはたらき」の単元においてOPPシートを作成し、授業で活用する。実施期日は、2013年4月19日～5月7日、10月2日～10月31日。対象は山梨県内の公立K小学校6年生20名である。授業は教科書に準拠する形で行った（表1、2）。

表1 授業の概要（ものの燃え方）

時限	学習活動	授業No.
1・2	ビンの中でろうそくを燃え続けさせよう	No.1
3	ものを燃やす働きがあるのは空気中の何か	No.2
4・5	ものが燃えた後の空気はどうなっているか	No.3
6・7		No.4
8	ものが燃えるしくみを説明しよう	No.5
9・10	発展学習	発展

表2 授業の概要 (てこの働き)

時限	学習活動	授業No.
1・2・3	棒で重い物を持ち上げよう	No.1、2
4・5・6	てこのはたらきにはどんなはたらきがあるか	No.3、4
7・8	てこが水平につり合うときのきまりを使って物の重さを調べよう	No.5
9・10	てこを利用した道具をさがそう	発展

【学習後】

学習は、いろいろな現象が繰り返して行っています。よきよきしんがの学習を繰り返して、燃える物の性質と燃えた後の性質について、図や絵、言葉で説明していきましょう。

チャレンジ

★燃えているろうそくに、底を切ったびんをかぶせてみたをしたら、ろうそくの火が消えました。火が消えた理由について「空気が燃焼」「二酸化炭素」という言葉を使って説明してみましょう。

火が燃え続けるには空気が必要か、必要かそれは空気の中に入っている酸素の量が、必要でも酸素と二酸化炭素とを混ぜて、燃え続けるには、必要か酸素(21%~18%)がなくなると火は消えてしまう。

もの燃え方と空気

学習のあしあと

(タイトルをつけよう)

火を燃え続けさせるには

6年組番
名前

【学習をふり返って】

学習名称をふり返ったり、学習前と学習後の自分の考えを比べてみて、思ったより考えたりしたことを書きましょう。

火は燃え続けるには空気が必要か、必要かそれは空気の中に入っている酸素の量が、必要でも酸素と二酸化炭素とを混ぜて、燃え続けるには、必要か酸素(21%~18%)がなくなると火は消えてしまう。

二酸化炭素は燃えかと思っていました。で、だということや空気の構成について、かた事からさ問を持つ事など、勉強に

図3 用いたOPPシートと児童の記述例 (児童12:表)

【学習前】

学習は、いろいろな現象が繰り返して行っています。よきよきしんがの学習を繰り返して、燃える物の性質と燃えた後の性質について、図や絵、言葉で説明していきましょう。

チャレンジ

★燃えているろうそくに、底を切ったびんをかぶせてみたをしたら、ろうそくの火が消えました。火が消えた理由について「空気が燃焼」「二酸化炭素」という言葉を使って説明してみましょう。

火が燃え続けるには空気が必要か、必要かそれは空気の中に入っている酸素の量が、必要でも酸素と二酸化炭素とを混ぜて、燃え続けるには、必要か酸素(21%~18%)がなくなると火は消えてしまう。

もの燃え方と空気

学習のあしあと

(タイトルをつけよう)

火を燃え続けさせるには

6年組番
名前

【学習をふり返って】

学習名称をふり返ったり、学習前と学習後の自分の考えを比べてみて、思ったより考えたりしたことを書きましょう。

火は燃え続けるには空気が必要か、必要かそれは空気の中に入っている酸素の量が、必要でも酸素と二酸化炭素とを混ぜて、燃え続けるには、必要か酸素(21%~18%)がなくなると火は消えてしまう。

二酸化炭素は燃えかと思っていました。で、だということや空気の構成について、かた事からさ問を持つ事など、勉強に

2月19日(金) No.1
燃えたびんは火は燃えるのか
今日の学習でどんなことがわかりましたか？
一番大切なことを書きましょう。
火はまた燃え続けるには、酸素が必要か、必要かそれは空気の中に入っている酸素の量が、必要でも酸素と二酸化炭素とを混ぜて、燃え続けるには、必要か酸素(21%~18%)がなくなると火は消えてしまう。

2月22日(月) No.2
燃え続けるには空気が必要か、必要かそれは空気の中に入っている酸素の量が、必要でも酸素と二酸化炭素とを混ぜて、燃え続けるには、必要か酸素(21%~18%)がなくなると火は消えてしまう。

2月23日(火) No.3
燃え続けるには空気が必要か、必要かそれは空気の中に入っている酸素の量が、必要でも酸素と二酸化炭素とを混ぜて、燃え続けるには、必要か酸素(21%~18%)がなくなると火は消えてしまう。

2月26日(金) No.4
燃え続けるには空気が必要か、必要かそれは空気の中に入っている酸素の量が、必要でも酸素と二酸化炭素とを混ぜて、燃え続けるには、必要か酸素(21%~18%)がなくなると火は消えてしまう。

2月27日(土) No.5
燃え続けるには空気が必要か、必要かそれは空気の中に入っている酸素の量が、必要でも酸素と二酸化炭素とを混ぜて、燃え続けるには、必要か酸素(21%~18%)がなくなると火は消えてしまう。

2月28日(日) No.6
燃え続けるには空気が必要か、必要かそれは空気の中に入っている酸素の量が、必要でも酸素と二酸化炭素とを混ぜて、燃え続けるには、必要か酸素(21%~18%)がなくなると火は消えてしまう。

2月29日(月) No.7
燃え続けるには空気が必要か、必要かそれは空気の中に入っている酸素の量が、必要でも酸素と二酸化炭素とを混ぜて、燃え続けるには、必要か酸素(21%~18%)がなくなると火は消えてしまう。

2月30日(火) No.8
燃え続けるには空気が必要か、必要かそれは空気の中に入っている酸素の量が、必要でも酸素と二酸化炭素とを混ぜて、燃え続けるには、必要か酸素(21%~18%)がなくなると火は消えてしまう。

2月31日(水) No.9
燃え続けるには空気が必要か、必要かそれは空気の中に入っている酸素の量が、必要でも酸素と二酸化炭素とを混ぜて、燃え続けるには、必要か酸素(21%~18%)がなくなると火は消えてしまう。

2月32日(木) No.10
燃え続けるには空気が必要か、必要かそれは空気の中に入っている酸素の量が、必要でも酸素と二酸化炭素とを混ぜて、燃え続けるには、必要か酸素(21%~18%)がなくなると火は消えてしまう。

図4 用いたOPPシートと児童の記述例 (児童12:裏)

OPPシートは、教師が授業の最初に配布する。児童は、前時までの教師によるコメントを確認し、授業の終了時5分程度で、本時の学習の振り返り（No.1～5、発展）をそれぞれ記述した。

5-2 研究の方法

OPPシートを作成し、小学校6年生「ものの燃え方」と「てこのはたらき」単元で活用する。今回使用したOPPシートの記述例（「ものの燃え方」単元）を図3、4に示す。これらを両面印刷し、3つ折りにして使用する。

授業終了後、そこに記された学習者の記述を整理し、分析する。その際、今回は、OPPAにおける②と③の2つの「問い」のもつ機能を中心に、それらが、学習者の「自己評価」においてどのように作用したのか、さらに、それと教師の「自己評価」の関係を整理する。

最後に、以上より、授業改善における「自己評価」の効果を明らかにする。

6. 学習者の記述より明らかになったこと

ここでは、OPPシートに記された学習者の記述より明らかになったことを整理する。まず、学習者自身が設定した「学習目標」が見られるようになったことと、学習意欲の向上についてである。

6-1 学習者による「学習目標」の設定と学習意欲の向上

これまで本授業の実施者である教師は、OPPAを活用した授業を展開していく中で、「ものの燃え方」単元までは使用するOPPシートの学習履歴欄に「感想」欄は設けていなかった。しかし、学習を進める中で、この欄に学習者が学習内容をまとめると同時に、学習に対する自分の考えや疑問を書くようになってきた。それらは、次の学習に関するものであったり、学習内容の一般化であったりした。

たとえば、児童6（図5）は、「自分の考え」という欄をもうけ、空気組成についての疑問を書いている。No.4（4月26日）において、この児童と同様の疑問を記述した児童は20人中9人おり、これらは、次の授業の導入として活用することができた。

つまり、この欄により、児童の考えがより明確に外化され、それらは、次の授業に関する教師への示唆となった。そこで、さらに学習者が自由に記述できるようにと「てこのはたらき」単元から「感想」欄を設けることにした。その結果、学習者自身の疑問により生まれた「学習目標」が増加した（表3）。これらは、教師が自分の授業をふり返る、つまり教師の「自己評価」に役に立つ内容であった。

さらに、教師がその直後に「素晴らしい！」といったような肯定的なコメントをすることで、児童の学習意欲が向上する効果があった。小学生に限らず、教師に褒められることは学習意欲につながるの言うまでもない。これは、学習者の疑問から発した次の学習への「学習目標」が、教

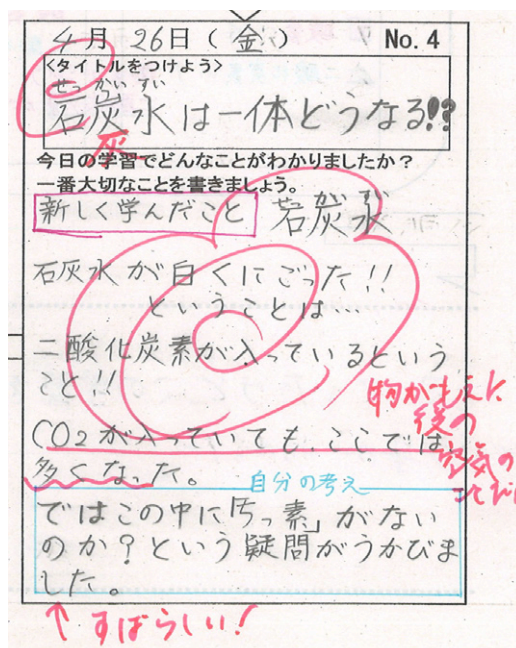


図5 学習目標の記述例（児童6）

表3 「学習目標」の形成の増加 (N=20)

	人数	児童
ものの燃え方	10	1,2,4,5,6,9,10,11,12,19
てこの働き	18	1,2,3,4,5,6,7,9,10,11,12,13,14,16,17,18,19,20

師のコメントにより肯定されたことでなされたと考えられる。

6-2 教師の意図を可視的に伝達できることの効果

また、「やっぱり人間はすごい」、「やっぱり理科はすごい」といった記述より、理科学習に対する意欲の向上と、科学と人間生活の関係を意識することができることがわかった。これらは、OPPシートという媒体により学習者と教師の間で、このようなやりとりが可視的な形になされたことで可能になったと考えられる。さらに、これらは教師が下線や丸をつけるだけでも、十分効果があることがわかった。教師側から見れば、下線や丸印は、教師の意図を強調することになるし、これを、学習者側から見れば、それにより学びのポイントが確認できることになる。

たとえば、図6のNo.2に「図でもしっかりとまとめましたね」という教師のコメントを受け、

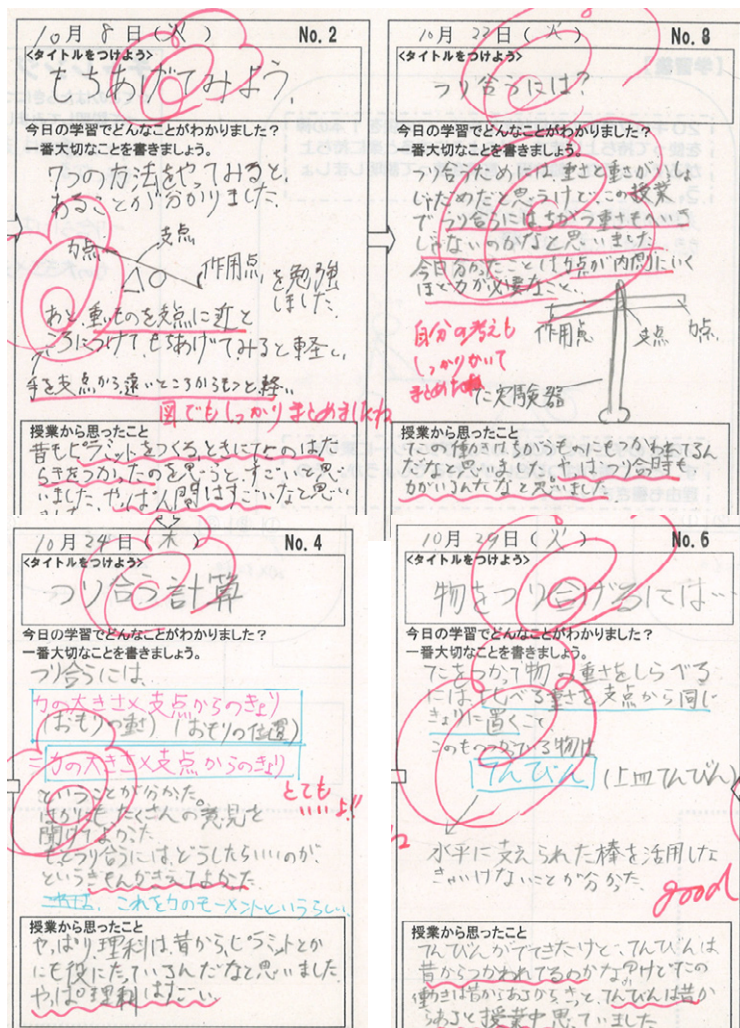


図6 下線、花丸、コメントの効果 (児童18)

No.3でも同様に図を用いて記入していることや、同じくNo.2 (10月8日)で教師が「やっぱり人間はすごい」に下線を引いたことから、学習者がその後の授業で同様に「やっぱり」といった書き出しで、素直に自分の考えを述べるようになった。これらは、学習者の考えが「一番重要なことは何ですか」という「問い」により、OPPシート上に学習者の考える基準として、可視的に外化されることで容易になされたと考えられる。

先ほどから述べるように、OPPシートは、授業終了時に回収し、教師がコメントを記入することで必然的に、その度に学習者と教師の間でやりとりを行うことになる。これにより、教師の意図がOPPシート上に可視的に示される。これらにより学習による効果の自覚化、すなわち的確な学習者の「自己評価」を促す効果があると考えられる。

6-3 学びをふり返る効果

ここでは、②と③の「問い」について、それぞれの「問い」の学びを振りかえる効果について考察する。

(1) 「一番大切なこと」を問う意味

まず、②「この授業で一番重要だと思ったことは何ですか」について検討する。教師は、授業中の机間巡視による声かけや、ノート確認を頻繁に行う。これは、言うなれば教師自身の「この授業が適切であったか」という問いに対する回答を得るためのものである。しかし、時間内に全員に確認することや、両者の意思の疎通が常に的確であるとは限らない。これらの、特に後者の克服には、教師の恣意的な質問ではなく、学習者の本音としての学びを把握する必要がある。つまり、今回の授業を通して、学習者が何を得て、何が変容したのかを教師ができるだけの確に把握することが、授業改善には効果的となる。

たとえば、図7は、理科に限らず全ての学習に意欲が感じられない児童の記述例である。4月22日の授業でこの児童が一番大切だと考えたのは「開けたり閉じたりすることで火が長つづきする」ことであった。この日の教師による指導目標は「継続的に燃焼がおこるためには、空気の循環（出入り）が必要なことを実験を通して理解させる」ことであった。しかし、この児童は、目の前の現象しか記入していない。これに対し教師は「いったいこれは何をしているのかな？」とコメントした。すると、次の時間に「ふたをはんぶんにした」と記入してきたので、さらに「空気の出入りをしていたんだよ」とコメントしている。このようなやりとりができたのは、OPPシートによる概念や考え方の形成過程を可視化する効果と、この「問い」の機能であると考えられる。

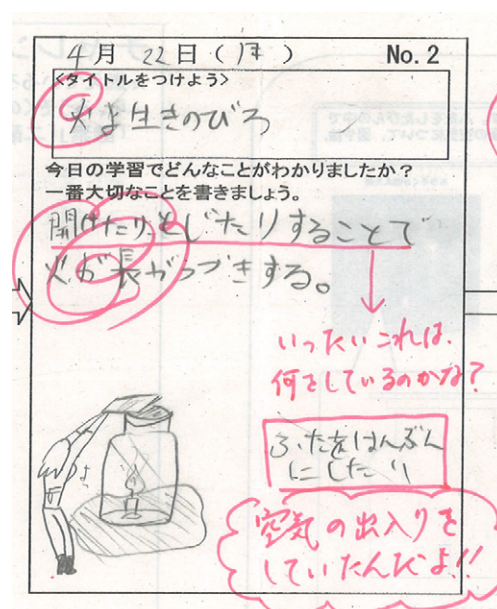


図7 指導目標との相違

つまり、この子どもにとって「一番重要なこと」は何かをOPPシートの可視化の機能により、教師が把握できたからである。

さらに、この児童は、タイトルでは「火よ生きのびろ」と記述している。これより、教師の指導目標はある程度理解しているのがわかる。このように、「一番重要なことは何か」という「問い」により得られた学習者の「評価基準」を通して、学習を通して得た概念や考え方を最小化させた形で表出させることが「自己評価」にとって重要な意味を持つことがわかる。

(2) 振り返りによる学びの深化と「自己評価」能力の育成

次に、③「最下段の問い」である。これは、この単元全体を通しての自己の変容を自覚させるための問いである。具体的には、たとえば、「学習前・中・後をふり返ってみて、何がわかりましたか？ また、今回の勉強を通してあなたは何がどのように変わりましたか？ そのことについてあなたはどのように思いますか？ 感想でもかまいませんので自由に書いてください」といった文言を設定する。今回使用したシートでは、図3、4に示す問いを設定した。このように、②においては「今

日の学習で学習者が考えた「一番重要なこと」を問い、③においては、文言は発達段階により多少異なっていたとしても、「この単元を通して自分が、何が変わったのか」を問う。つまり、先ほどの②が1回分の学習をふり返るのに対し、③では、単元全体の学習のふり返りを促す。これらの「問い」によりなぜ理科を学ぶのかと言った理科を「学ぶ意味」や「学ぶ必然性」の獲得が見られた。

たとえば、図8の児童は、「最初の頃は」、「勉強して行くにつれ」というように、時系列で学びをふり返っている。これは、OPPシートが一枚の紙であることにより、一目で単元の学習が確認できることによるものと考えられる。さらに、「最初の頃は簡潔にただまとまっているという感じだった」が、「最後の方は疑問があってそれを解決できたり、とても見やすく、色も使って書くことができました」といったように、教科書の内容にとどまらない学びの足跡をふり返ることで、自分の学びが深化していることを自覚している。

また、図9の児童は、「前はきょうみもなく」という状態から「自分がつかっていることに気づいて」、「どうすれば簡単につかえるかも考えるようになった」と自分をふり返っている。これは、自分の学びを「メタ認知」することでなされていると考えられる。「メタ認知」は、この振り返りを繰り返し行うことで育成されると考えられる。

以上より、先ほどの②「今日の授業で一番重要なことは何ですか」という「問い」と、③「最下段の問い」は、学習者に必然的に自己の学習をふり返ることを可能にすることで、今日の授業の、そして、単元全体の授業の最初から最後までを振り返り、何を学んだのか、何があったのかを再

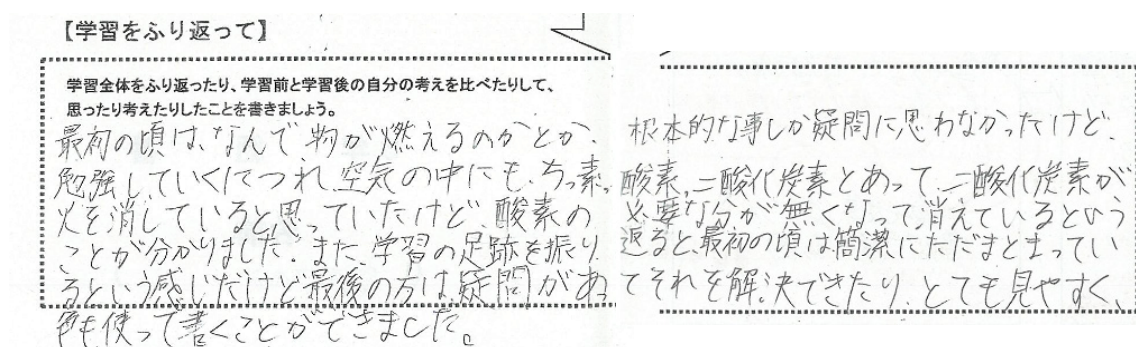


図8 最下段の記述例 (児童19)

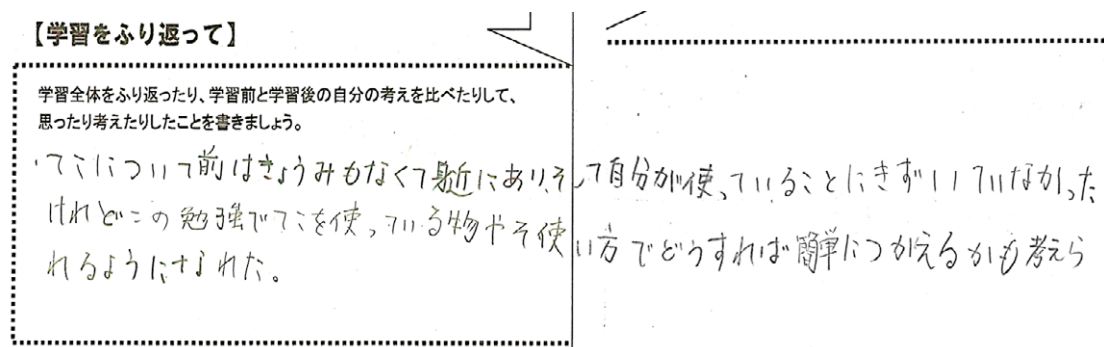


図9 最下段の記述例 (児童4)

確認することを可能にすることがわかった。さらに、その結果を狭い枠の中に、まとめる必然性が生じることでふり返りを促し、これらが学習者の学びを深化させている可能性がある。これが、「メタ認知」つまり「自己評価」能力の育成を促すと考える。

7.まとめ

これまでに明らかになったことをまとめると次の3つに集約される。

7-1 教師の「自己評価」

「1. はじめに」でも述べたように、これまでは学習者の「自己評価」と教師の「自己評価」を結びつける視点が明確ではなかった。さらに、それを実際の授業でどのように行うかの提案もほとんどなされてこなかった⁶⁾。それは、これまで実際には行ってきていた教師の机間巡視やノート点検について、それらが学習者の学びに基づく教師の「自己評価」であるといった視点から議論されることがなかったことによると考える。「6-3 (1)『一番大切なこと』を問う意味」でも述べたように、教師の机間巡視やノート点検は、教師自身が、自己の授業を「自己評価」するために行っているものである。具体的には、たとえば、「この児童・生徒はこういう風に考えているのか」や「(教師の) この発問は的確だったのか、否か」を教師はその場で「自己評価」し、指導に生かすために行う。つまり、これこそが、指導と評価の一体化にほかならない。小・中・高等学校、大学の教師を含め、優れた教師であれば、授業中のこのような「自己評価」を頻繁におこなってきているはずであろう。しかし、これまでは、それらが一斉授業で目の前にしている学習者全員に対し、しかも、授業終了直後瞬時に行うことは難しかった。しかし、今回、OPPAにおける問い、具体的には②の「一番大切なこと」を問うことや③の「最下段の問い」により、教師が自己の授業を「自己評価」することが可能になることが明らかになった。

7-2 学習者の「自己評価」に基づく教師の「自己評価」

さらに、それらは学習者の「自己評価」に基づいていることが重要だと考える。今回、OPPAを授業で活用することで、それが可能になることが明らかになった。たとえば、OPPシートに見られた学習者による「学習目標」の設定である。これにより教師の「指導目標」との相違が明確になったことや、学習者の意欲向上がみられたことである。ここで重要なのは、授業における目標を教師によるものと学習者自らによるものと区別することである。学習者は、学習を重ねていく中で、自ら「学習目標」を設定することが今回の研究からも明らかになった。これについて、OPPAの開発者である堀 哲夫は、教師による目標を「指導目標」、学習者によるそれを「学習目標」とし、両者を明確に分ける必要があると主張している⁷⁾。この区別により、学習者の「自己評価」に基づく教師の「自己評価」が可能になると考える。

7-3 OPPAにおける「問い」の効果

先ほどから述べるように授業の中で「自己評価」するためにはふり返る必要がある。OPPシートの「問い」は、このふり返りを促す働きがあることがわかった。この「問い」により、学習者は、必然的に自分の考えを簡潔にまとめ、OPPシートの狭い枠の中に記入（言語化）しなければならない。これが、「メタ認知」を促す言語活動となる。ここでの「一番大切なこと」は、あくまでも

学習者にとってのものなので、必ずしも教師が意図するものと一致するとは限らない。それにより、学習者による「学習目標」は生まれ、それが教師の「自己評価」を促す。

このように、「自己評価」、すわなち、概念や考え方の形成過程の自覚化という視点に注目することで学習者の「学ぶ意味」や「学ぶ必然性」の獲得による学習改善を可能にする。したがって、教師は授業を行う際「学習者が学習による変容を自覚すること」、つまり「概念の形成過程の自覚化」に働きかけることが重要となる（図10）。これは、使用する教材や実験・観察を含む授業方法や指導法にとどまらない。たとえば、カリキュラムを構成する際にも、重要な視点となる。この作業を通して、教師の「自己評価」はなされる。以上より、「自己評価」に注目することが授業改善には有効であることがわかった。

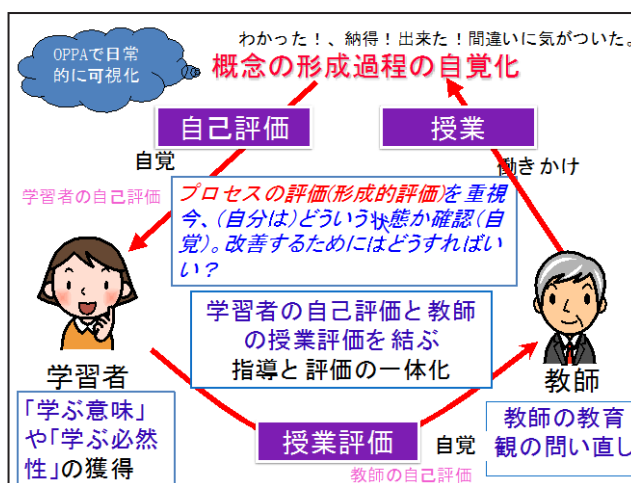


図10 教師の自己評価と学習者の自己評価の関係

これは、使用する教材や実験・観察を含む授業方法や指導法にとどまらない。たとえば、カリキュラムを構成する際にも、重要な視点となる。この作業を通して、教師の「自己評価」はなされる。以上より、「自己評価」に注目することが授業改善には有効であることがわかった。

8. おわりに

本稿では、「自己評価」による授業改善について、OPPAの3つのうち②と③の2つの「問い」を中心に検討した。残りの①「本質的な問い」については、教師の教育観の育成・変容を促す効果があることがわかっている。これが、実際の学校現場でどのように行われているのか、どのような「本質的な問い」が効果的なのかについての検討はまだ不十分である。今後は、このOPPAにおける「本質的な問い」についてその意義を明らかにしたい。

註

- 1) 堀 哲夫 (2013) 『教育評価の本質を問う 一枚ポートフォリオ評価OPPA 一枚の用紙の可能性』 東洋館出版社。
- 2) 中島雅子 (2016) 『「見取ること」をめぐる課題とその克服—「自己評価」による授業改善を中心として—』 『理科の教育』 東洋館出版社、pp.5-8。
- 3) 山下春美・中島雅子 (2016) 「教育観の変容とOPPA—経験を重ねた教師の授業改善—」 『埼玉大学紀要 (教育学部)』 Vol.65、No.1、pp.15-24。
- 4) 田中耕治 (2008) 『教育評価』 岩波書店、p.125。
- 5) 山下・中島、上掲論文。
- 6) 中島雅子・松本伸示 (2014) 「概念形成の自覚化に注目した理科教育の自己評価に関する一考察—自己評価のとらえ方の変遷を中心として—」 『日本教科教育学会誌』 Vol.37、No.2、p.76。
- 7) 堀哲夫、同上書、p.22。

Learning improvement based on student “self-assessment”: focusing on the case of an elementary school science class applying OPPA

NAKAJIMA, Masako

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

The purpose of this study is to clarify the necessary elements and the effect of “self-assessment” for class improvement. The type of “self-assessment” used in this study promotes the awareness of the transformation of concepts the students and teachers employ in their thinking. In this study we examine the case of a 6th-grade elementary school science class that applies the OPPA-One Page Portfolio Assessment in learning about the “principle of burning” and the “lever rule”. The study clarified the three points below. First, it is important to pay special attention to the educator’s “self-assessment”. Next, as the educator’s “self-assessment” is based on the learners’ “self-assessment”, specific ideas for class improvement become apparent from this point of view. Finally, initiating a process of improvement becomes easier by applying OPPA to the class.

Keywords: self assessment, OPPA, class improvement, educational evaluation